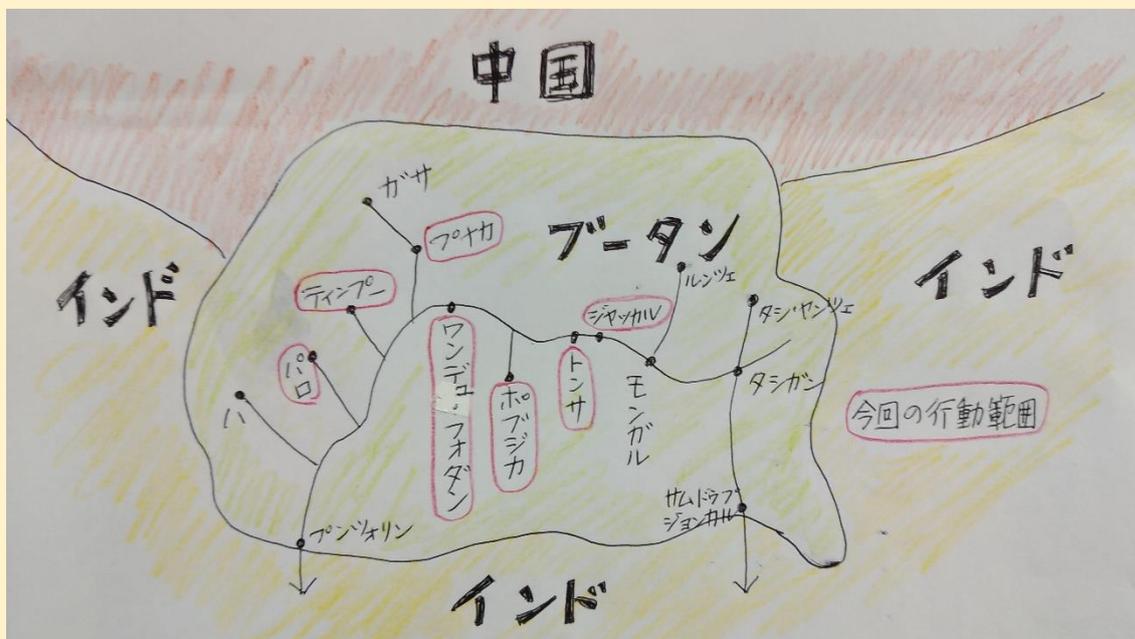


第3回ブータン旅行 (2015年5月1日～5月8日)



本当は早くサンティアゴ・デ・コンポステーラに行きたかった。でももう一年待ってくれと夫が言うので仕方なく今年はブータンにした。三年前にブータンに初めて行った時にはぼ西の端にあるパロから東方面へトンサまで進んだが、その翌年二度目に行った時にはちよっと脇にそれてポブジカという村まで行ってきた。今回はトンサより先のブムタンまで行きたいので日程は八日間を計上。スペインに行けない間を埋める「つなぎ」の旅だとしても出来るだけ充実したい。それでいろいろなプランを考え、三か月くらいかけて準備にいそしんだ。

5月1日(金) 出発の日

義母の訪問入浴がある。そのあと買い物。あちこちスーパーを巡る。

17:00、歯科に行く。一昨日から歯が痛かった。これで一件落着。

19:25、家から出発。丁度息子が帰宅する。

電車の中で、ケータイの充電器一式を忘れたことに気付く。あーあ・・・と思いながら夜九時過ぎ羽田着。チェックインを済ませて外貨交換もし、コンビニでおにぎりを買ったあとで公衆電話で家に電話をかける。充電器のことを話しこれからひたすらバッテリーを節約することにうる、というと夫が「羽田のコンビニで売っていると思うから一つ買え」と言う。

が、私は迷う、というより何だか疲れが出たらしくて動きたくなかった。それでどこも見物せずに十一時過ぎまで座ったままでいた。でもそのあとようやくコンビニに行ってみる。すると電池式の充電器が売っていて使えそうなので買う。それにしても空港内のコンビニっていつもものすごく混んでいる。

機内にて。私の席は機体のど真ん中であつた。両隣は日本人の女性。眠ると私の頭が右隣に落ちがちになるので右の女性がシートの頭の部分を直してくれる。

機内食。まずドリンクと三角形のサンドイッチが出た。これは食べやすかった。そのあとは無理に眠ろうとすると逆効果なのでなるべく自然にしていることにする。たかだか六時間だ。大したことはない。トイレは横の人が立ったら一緒に立つようにする。

機内食というのは変な時間に出るのでちょっと困るがもうかなり順応できるようになっている。午前三時ごろの「朝食」はスクランブルエッグという名のオムレツと、フライドポテトのようなものとソーセージだった。味が薄めだったのが残念だがまあ美味しかった。でも多すぎて食べきれなかった。それでまず私はメインは後回しにして添えられているフルーツを食べ、ヨーグルトとカップケーキは持ち運びが可能なのでテイクアウト、持ち運びの出来ないものを食べられるだけ食べてあとは残した。クロワッサンもあつたが半分だけ食べて残りをテイクアウトした。

5月2日（土）

タイのスワンナプーム空港での乗り継ぎは何だかいつもまごつく。もう三度目なのにな。でもようやく「ああ、見覚えが・・・」という状態になる。ドゥク・エアー（ブータン航空）のカウンターで「ウィーサ」がわからずにまごつく。ヴィザのことだった。そういえば以前にもこんなことがあつたっけ。

搭乗手続きはビジネスクラスの人たちからだ。そういえばいつもそうだっけ。

ドゥク・エアー、エコノミーでもあまり狭いと感じないで過ごせるので好きなのだが実際は狭い。窓際の席でラッキーだったが出入りには苦勞する。

通路側の席に何人なのかわからない女性が来る。ブータン人かもしれない。でももともとは別の席の人らしい感じである。私の隣が二席続けて空いていたので来たのかもしれない。通路側に座った彼女は隣の席にまで足を上げる。でもそのほかの態度は特に無礼ではない。機内食はタイ航空内で出たものとよく似ている。美味しいのだが少し飽きたなという感じがする。飛行機は途中インドのコルカタに寄る。インド人の親子が搭乗してきた。二、三歳のぼうやと赤ちゃんを連れた女性でご主人が少し離れたところにいるようだ。

CAさんが先ほどの女性に自分の席の戻るように指示し、そのあと私の隣のどちらかの席の本来の持ち主であるインド人の少年が来る。しかし二席続きで使えるためCAさんは赤ちゃん連れの女性にその席を譲ってくれるようにその少年に頼んだ。

むずかる乳幼児二人を宥めるためにCAさんはアメなどを持ってきて奮闘する。私はしばらく前からトイレに行きたいのを我慢していたのだがさっきのずうずうしい女性にはちょっと話しかけ難かった。ところがそのあとその親子連れが来てしまったのでますます生きにくくなった。でもパロまではけっこう時間がかかり、我慢も限界の私は結局着陸三十分ぐらい前に道を開けてもらってトイレに行った。でも退屈している子供たちにとってはその「変化」はむしろ退屈しのぎになってよかったような感じであった。



パロ空港に到着する。今回はスーツケース持参なので（荷物を自分で持ち運ばなくていいから）もちろん預けてある。それが出てくるまでにかなり時間がかかる。やっと出てくるがそのあと外貨両替の窓口がわからなくなり係員の人に案内してもらう。

空港の外に出るとこれまでの時よりもものすごく多い数のガイドやドライバーたちが待機している。すごいな！シーズンなのでこれだけ観光客が多いんだ。

私に着くガイド・ドライバーは二十五歳前後の見える若い二人組。あとで私の子供のことを聞かれた時に

「私の息子は二十五歳だがあなたたちもそのくらいか？」

と聞いたらそうだと答えていた。そのあとガイドさんのほうは二十四歳だと知った。ドライバーの方はもう少し上のようだったがせいぜい二十六か七でそれ以上ではなさそうだった。ドライバーの方は私の息子をもっとワイルドで精悍にしたような風貌である。時々私用の電話をかけている様子で「今、トンサだよ。」とか言っている。結婚しているのかなと思い、あとで尋ねてみるとやはりそうだった。

ガイドさんは、みんな大概そうなのだがとても親切で人懐っこく話好きな感じである。喋るのが好きな方がガイドになり無口な方がドライバーになるといった感じだ。でも後になって思ったが今回のガイド氏はちょっとしつこい。みんなある程度はそうなのだが名所などを見学すると彼はいろいろな知識を熱く熱く語ってくれる。私は一生懸命耳を傾けるのだが、チベット仏教についての詳しい話など日本語で読んだり聞いたりしてもよくわからないのにそれをブータンなまりの英語で早口でまくしたてられるとかなり困惑する。一生懸命納得しながら聞いているふりをしていたが、半分以上わからなかった。

ガイドさんたちは基本的には客の食事には同席しない。客を席まで案内して「ごゆっくりどうぞ」と言った後、別室で食べるのが普通である。しかし今回のガイドのC氏はかなりし

つこい人で辟易した。

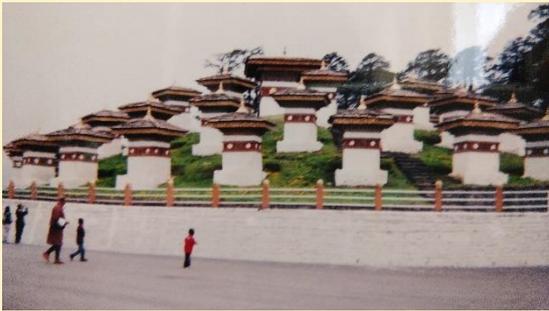
「おいしい?」「楽しんでいる?」と同じことを何度も聞きながら一、二分間私の食べるところをじっと見ている。落ち着かなくて仕方がない。「早くあっちへ行ってくれ。」と内心思いながら、頷きながら一生懸命食べる私……。まるでナンパされているような気分だった。でもまさか……。彼は仕事上予め私の年齢を知っているだろう。単に人懐こいだけだろうか。彼はどこのホテルについてもその従業員たちと親しそうにしている。仕事上顔見知りということはあるだろうが、全員知り合いというわけでもないだろう。

ドライバーの方はKという名だと聞いた。彼はC氏に比べるとずっと無口だがむっつりというわけではない。彼の方が私の近くにいれば向こうの方から話しかけてくることもある。ショップで土産物を選んでいる時などC氏の場合と同様に「これがいんじゃないか?」「これは?これは?」と勧めてくる。でも私としては自分の都合でいろいろと考えているのでちょっと黙ってほしいというのが本音である。

私はブータン初日はいつも絶好調とはいかない。どうしてもエコノミーの長いフライトの後で疲れているし寝不足でもある。勿論乗り物酔い止めの薬は服用していたが、体がボールのように弾み荷物も転がる山道のドライブはかなりこたえる。走っている時間の半分は横になっていたが、でも横になればなるで身体は滑ったり転がったりするので起きている方がずっとマシだと思うこともあった。山道のロングドライブが大好きな私だが今回は初日からこれでは先が思いやられた。年を取るとブータンの旅というのはハードすぎて考え物かなとも思ってしまう

でも翌日になると気にならなくなった。よく眠って体調がよくなったせいもあるが、むしろ道がだんだん良くなってきたのである。ブータンでは奥地に行くほど悪路になるというわけではなかったのだ。ドチュ・ラ(峠)の前後が一番の悪路なのだ。ティンプーとプナカ、またはワンデュ・フォダンの間の峠である。パロやティンプーから東の方面に行くには必ずこの峠を通らなくてはならない。採石のためにそうなっているのか自然に崩れ落ちるのかわからないが、今にも崩れそうだったりあるいは半分崩れている岩石の壁や堆積の横をずっと曲がりくねりながら通っていく。時々岩石が落ちてきたための通行止めや、狭くて引っかかるのでなかなか車がすれ違えないといった場面に遭遇する。

ブータンでも運転免許は十八歳から取れるがプロのドライバーには二十五歳以上でないと取れないのだそうである。それはそうだろうな。こんなところをよく平気で運転できるものだと思う。ブータンのドライバーの腕は世界一だろう。交通事故もゼロではないだろうがしょっちゅうあるとは聞いていない。



東に向かう時には必ず通るドチュ・ラ



死んだようなポーズで昼寝する犬



レストランの待合室のベンチの上のヤタ織りのクッション

その日はワンデュ・フォダンの先のチュゾムサの「キチュ・リゾート」というホテルまで行くのだったが途中通行止めがあり、迂回してプナカを回って行った。ブータンの道はどこもくねくね。山だらけの国だが日本のように一生懸命トンネルを掘ったり谷を跨ぐ橋を架けたりせず、自然にあるものはそのまま置いて「自動車道」という後からのものはそれらを壊さないように迂回しながら進んでいく。だから直線距離の四、五倍走っているのではないかと思う。

チュゾムサの「キチュ・リゾート」はコテージ式のホテルで庭がとても綺麗だった。それで花の写真を何枚も撮った。シャワーを浴び、着替え、家に電話をした。メールをすると何だかそのあと DOCOMO からわけのわからないメールが沢山来るので嫌だ。電話には娘が出た。家は変わりなさそうである。



部屋で荷ほどこき



食堂 何だか日本風なインテリア



食事はいつもこんな感じ



撮影が下手ですみません





以上10枚、キチュ・リゾートの美しい庭の写真です

5月3日（日）

朝八時三十分ホテルを出てトゥロンサ・ブムタン方面に向かう。わりと快適である。今日は自作の縦じまのハーフ・キラを着用。ところで昨日パロ空港を出て間もなく目についた木に咲く赤い花の名前を C 氏に尋ねると、わからないので調べておくと言っていた。そして今日「あれはゾンカではエト・メトという」と教えてくれた。あとでわかったが「エト・メト」とはシャクナゲのことであった。

でもあの赤い花、本当にシャクナゲだろうか？キチュ・リゾートの庭に咲いていたのはバラ科の花のようだった。しかも「エト・メト」というのは「赤い花」という意味でもある。ブータンでは名前の付け方が大雑把で赤い花のことをシャクナゲも含めて全部「エト・メト」というのだろうか？

ノブディン（ブータンの紀行文にはよく登場するクエンペンレストランがある）を過ぎ、ポブジカへの分岐点を過ぎる。ノブディン付近は家がだいぶ増えている。ティンパーでもパロでも家がどんどん増えている感じだが田舎も例外ではない。観光客がどんどんお金を落としているからなのか。日本のような「地方の過疎化」という心配はあまりないのかな？

懐かしい道、ルクジの畑、あれはみんなジャガイモ畑なのだそうだ。その大地の端っこに赤い屋根の新しい小学校ができています。のどかな気分で窓の外を眺めていると車はいつの間にかペレ・ラ（峠）を過ぎブラックマウンテンを越える。西部地方から中部地方に入ったわけである。ガイドさんが「写真を撮る？」としばしば尋ねてくるが私は旅の写真はフィルム39枚撮り三本以内に収めようと決めているのでフィルムは節約しなくてはならない。それ以上写すとプリントをする費用もアルバムを作る手間も大変だからである。もう三度目のブータン訪問なので前に撮ったようなところはもう撮らない。ところでこのあたりにはヤクが沢山いる。前回ポブジカに行った時にもよく見た。



チェンデブジのチョルテン



レストランの中のスーベニールショップ

チェンデブジのチョルテン（仏塔）を見学。トイレに寄る。和式のトイレと同じような感じだ。「チェンデブジ」はガイドブックには「チェンデジ」と書いてあるがガイドさんの発音は「チェンデブジ」だった。そしてチェンデブジのチョルテンの少し先のレストランで昼食。そこにはスーベニールショップもあってそこでは木彫りの動物や彩色した小箱などが沢山あり、あれこれ迷いながらいくつか購入した。

トゥロンサの町を通過。ガイドブックには「トンサ」とあるがガイドさんたちは「トゥロンサ」と発音している。アルファベット表記の綴りの中にもちゃんと R の文字が入っているので「トゥロンサ」が正しいのだろう。前には気づかなかったがかなり大きな町だ。しかし普通商店街というものとは山あいの町でもなるべく下の方のなるべく平らなところにあるものだろうと思っていたがここでは高い位置の斜面の上に平気で大きな町ができています。前に行ったことがあるのでトゥロンサ・ゾン（城）の見学はパス。よく覚えていないんだけどね。

ヨドン・ラでひと休み。「ラ」というのは峠のことである。風が強い。この峠を越えるのは初めてである。ブムタンのジャッカル町まであと40kmだそうである。地図で見ると直線距離で15kmくらいなのだが。



ヨドン・ラの風景 ブータンの名所・旧跡はダルシンとルンダにあふれている。



ヨドン・ラの付近にはヤクがたくさんいた。

ズンゲというところのヤタという織物の工房付きのショップで買い物。欲しかったラチュを見つける。ラチュというのはキラで正装をする時に肩から掛ける美しい帯のようなもの。でもストールとは違う。真っ赤な地色で煌びやかな刺繍があり、色鮮やかすぎて私の持っているキラに合わせるのが難しい気がしたのだが他になかったのととりあえず買った。



中央にある鳥の模様の物が今回買ったラチュ。 後の物は今回は持参しなかった。

ブムタンのホテル・ウゲンリンに到着。高級感のあるホテルであった。ここでもロビーで例のビスケットと紅茶をいただいた。食堂とフロントは同じ棟にあり、客室の建物は背後にあって渡り廊下で移動する。私の部屋は三階だったと思う。とても広い部屋だった。部屋の真ん中にストーブがあり、それをはさんで寝室とリビングに分かれている。要するにスイートルームだ。こんなに広くていいのか？洗面所もシャワールームも広いがシャワーだけでバスタブはない。まあどこも大概そうであるが。

部屋に入ってすぐに一人のメイドさんがあたふたとやってきた。「ダストだって？」と言

っている。初めは何事かわからなかったがよく見ると部屋とトイレの間ぐらいに土壁が崩れたような砂のようなものが落ちている。メイドさんは足で雑巾を動かし、拭きながら出て行った。

ここで私は自作の別のキラ一式に着替える。白地に花模様のワンジュ（ブラウス）とオレンジ色のハーフ・キラ（スカート）と若草色のテュゴ（上着）に着替えて食堂に行く。当然注目される。



実物の写真は写りが悪いのでこれでご容赦下さい。

欧米人の老夫婦が相客で、奥様がメイドさんに「ダンケ」と言っていたように聞こえたのでっきりドイツ系の方かと思い、ドイツ語で「こんばんは」と言ってしまう、翌日になってから英国の方々だとわかって恐縮した。あれは“Danke!”ではなくて“Thanks!”だったのだ。

翌朝その後夫婦と少し会話をした。ブータンに来る前に日本に寄って来られたそうである。え～え、日本とブータン？近くはないのに。しかしその取り合わせは流石お目が高いと言うべきか。

夜、トラベル用のソーイングセットでワンジュの襟を細工する。外側に折り返しやすいようにしたのである。ヘナヘナの糸だったのでなかなか針の穴に通せなかったが、部屋の赤味がかかった照明の下ではなくトイレの方の蛍光灯の下でやったらすぐに通せた。シャワーはその晩は使わなかった。



ホテルの部屋の中。実はものすごく広いスイートルームだった。

5月4日（月）

ワンデュ・チョリン御殿を見学。初代国王ウゲン・ワンチュクの父、ジグメ・ナムゲルが1857年に建てたものだそうです。



そのあとメンパル・ツォという伝説の湖を見に行く。「ツォ」とは湖のことだが行ってみるとどう見ても小さな「淵」にすぎず池ですらない。そこに行くまでに山道を少し歩いたのだが山道に入る前にガイドさんたちは何でも屋のような店に寄って「ルンダ」を購入した。「ルン」は風、「ダ」は旗の意味である。ブータンに行くと至る所に万国旗のように翻っているあの色とりどりの小さな旗である。それが何枚ずつなのかはわからないがある程度の枚数が長い紐に予め取り付けられた状態になって巻き畳まれて売られているのだ。あの旗には予めお経の経文が印刷されている。あのお経が風に乗って世界中に吹きわたって広まるという信仰である。あれはいつ誰が設置するものなのか私はそれまで深く考えたことは

なかったのだが、そうか、個人が各々の信仰の証のために買って奉納するものなのか。日本の神社に掲げられる絵馬のようなものだ。でも絵馬は個人の願いを込めるもので、反面ルンダは世界の平和と幸福を願って掲げるものだという違いがある。

「あなたも買う？」と聞かれ私は戸惑う。何となく私は買わなかった。でもやってみてもよかったかな、と後で考えた。

メンパル・ツォはちょっと聖地のような感じだ。ルンダが沢山掲げられている。そこにお聖人様のような老人がいた。お賽銭をあげる場所もあった。私もお賽銭をあげてお参りした。



チャムカルという町でチーズやジャムを買う。お土産用である。チーズは真空パックになっているが帰るまで大丈夫だろうかとずっと心配だった。

ピザ屋さんに入る。ブータンにもピザ屋があると聞いてどんなところだろうと興味を持ち、行ってみたいと申し込んでおいた。それは思ったよりも小さくて田舎っぽい店だった。というより知らなければとてもピザ屋には見えない。失礼を承知で描写すると、日本の五十年以上前の、名もない田舎町の、町に一軒しかない食堂みたいな。テーブルや椅子はあり、奥へ注文すると食べ物を用意してくれる、みたいところ。数人の客がいたような気がする。

室内の高い場所にテレビが設置してあり、先日のネパールの地震の救援に行っている人たちの活動の様子について報道していた。ブータンからも救援隊が行っている。

「あれがブータンのテントだ。」

とドライバーのK氏が言った。

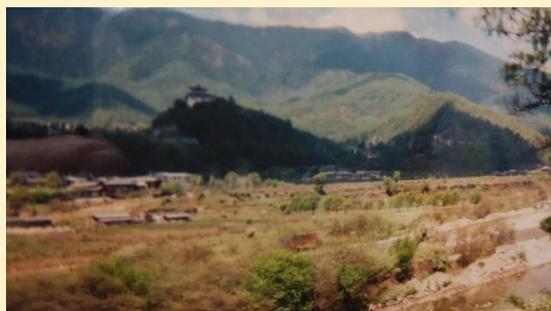
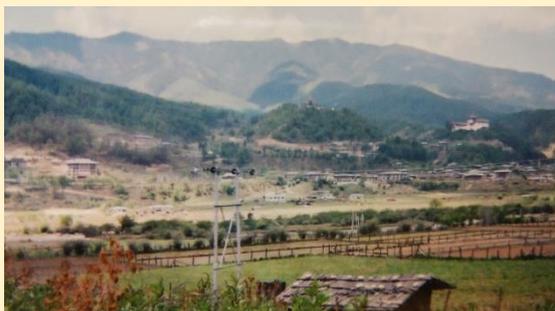
「あの人は知っている。偉いお医者さんだ。」

とも。個人的に知っている人だという意味なのかどうかわからなかったが、ブータンは小さ

な世界なので有名人と顔見知りということもよくあることなのかもしれない。

それからその店の中には国王ご夫妻や王室の方々のお写真も掲げられていた。その中に2006年に退位されて現国王に位を譲られた前国王（第四代国王）と四人のお妃たちのお写真もあった。お妃の方々は四人姉妹だそうである。ブータンは法律的には一夫多妻も一妻多夫も認められていてトラブルが起きなければ問題なし、ということなのだが今の第五代国王陛下は一夫一婦制を推奨し、それを実行しておられる。

ところでピザ屋さんには行ったのであるが、昼食にはまだ時間が早すぎる（10:40ごろだった）でピザはテイクアウトにしてもらい次の予定をこなしに行く。



ブムタン地方の風景。この辺りは比較的平地が多い。



ジャッカルの町にはタクシー乗り場もある。しかし外国人旅行者が乗ることはありえない。



ジャッカルの街の通り。商店街です。

標高3500mのタルバリンというところにあるチョダ・ラカンという寺に参詣する（「ラカン」というのは寺のことである）。タルバリンは、晩年の一時期をここで過ごしたニ

ンマ派（チベット仏教の一派）を代表する学僧ロンチェン・ラブジャンバによって十四世紀中ごろに開かれたもので、僧院や高等仏敎学校、仏殿、宿舎が点在する。尤もこれは後からガイドブックで調べたことで、残念ながら私自身の記憶としてはただ「お寺に行った」という印象でしかない。困ったものである。何のために何度もブータンを訪れているのかわからない。



チョダ・ラカンの写真はこれだけです。内部の撮影は遠慮しました。

そこまでの道のドライブは結構ハードであった。暑くて長い道だった。そして参詣がやっと終わってもう午後の二時になってしまった。それで車で下山する途中の道端でピクニック風にテイクアウトのピザを食べる。食べきれないので他の二人に沢山食べてもらおうと思うが、彼らも食べきれなくて全体の三分の一が残ってしまった。



このパックの中身がピザです。



運転手のK氏。右にガイドのC氏がいる。

「これを売るか？」とC氏が言う。「買う人がいるだろうか？」と私が言うと「安ければ買うんじゃない？」とK氏。

そしてトゥロンサの「タンニンジェ・ゲストハウス」というホテルに到着。商店街に面した建物でロビーの入り口と部屋の入り口が別。ロビーでお茶と例のビスケットをいただく時にC氏に写真を撮ってもらう。せっかく着たんだもんね。（でも写りが悪かったので公開

できません。イラストでご容赦下さい。) さっきのピザはC氏がフロントの女性に「ピザだけど食べる?」と言って渡していた。

夕食のためにはまた外に出て地下二階くらいまで階段を降りる。青いキラ風のスカートをつけた自作のドレスを着ていき、従業員の女性がそれに注目して褒めてくれる。

夜、家に電話をする。夫が出る。喋っているうちにバッテリー切れして電池式の充電器でチャージ開始。この部屋のドアの鍵の開け閉めが難しく、よく人を呼んでやってもらっていた。

5月5日(火)



ホテルの部屋の窓からも見えたトゥロンサ・ゾン。前に行ったことがあるので今回はパスした。

今日の服は一昨日の昼間と同じ。朝、トゥロンサの山の上にあるタ・ゾンに行き、その中にあるミュージアムを見学する。風景も最高だし建物もすてきだし、中の様子もらせん階段を四階までぐるぐる昇って行きまだあるのか、まだあるのかという感じだったけど面白かった。展示物も素晴らしかった。でもいつもそうなのだがC氏の熱い語り口は耳に吹き付けられる熱風のように・・・。K氏は苦笑している感じだった。



タ・ゾンは美しいミュージアムだった。

実は前日ホテルに着く前にここに寄ったのだったが休みだったので今日出直したのであった。でも今日でよかった。昨日はちょっと疲れすぎていた。それに午前中の方が涼しくてよい。

そのあとトゥロンサを後にプナカに向かう。途中チェンデブジのレストラン兼スーベニールショップに寄ってもらいゾウの置物などを買いつくす。私がふくろうの形をした小物入れになっている置物を一つ手に取ったらうっかり落としてちょっと欠いてしまう。それをC氏がこっそり元に戻そうとするが私はそれを買うつもりだったので予定通りに買う。欠けた部分は茶色い色鉛筆でも塗ればよい。実はここに着くまでの間に私はちょっと気分が悪くなっていた。でも店に入る前に少し休み、それから買い物をすませ、すっかり体調も戻ってまた出発。

ペレ・ラで休憩。予定表には「シャクナゲを鑑賞」と書いてあったがC氏たちはそんなことは一言も言わない。ただ私がそばに咲いている赤い花や白い花のことを尋ねると「エト・メトだ」と言う。やっぱり「エト・メト」＝シャクナゲか。

しかしシャクナゲより目に付くのはそこに「ヤタ」というブムタン地方特産の毛織物製品の出店が沢山あって、まるで洗濯物を掛け広げているように沢山陳列されていたことだ。みんな綺麗で素敵なんだけど残念ながら使えないので買えない。何とかそのことをC氏にわかしてもらおうとするが「記念に持っているだけでもいいのではないか」と言う。しかし日本では「使う機会のないものを記念に沢山持っている」というのはものすごい贅沢だし、最近ではむしろ悪徳のように言われているのだ。断捨離というのが国民挙げての暗黙のローガンのようになっているのだから。うっかり使いそうにないものを人に上げたりしたら、

どんなに素敵なものでも本人がよほど気に入ってくれない限りそのうちきっと捨てられる。そうでなければ「捨てたいんだけど捨てちゃいけないよなあ・・・」と悩ませる。それはとても申し訳ないことなのだ。

K氏が何か買っていたので「奥さんにお土産かな？」とC氏に言ってみると「いや、自分のものを買っているんだよ。」と言っていた。



ペレ・ラで商品として展示されていたヤタの毛織物の数々

やがてまた出発する。ノブディンの、何度も寄ったことのあるクウェンペン・レストランで昼食。ややや・・・ここもやけに混んでいるなあ、と思ったらドイツからの団体客が入っている。六十～七十代くらいの十数名のグループで大変に賑やかだ。そして彼らの会話は間違いなくドイツ語だった。

私はやかましいところにはあまりいたくないのでさっさと食べ終わり外で休んでいた。するとやがて団体の皆々も外に出てきた。バスを置いて皆、何やら下の方に歩いて行く。一人の老婦人に念のため「どちらから？」と英語で尋ねてみると「ドイツから」という答えだったので大丈夫！と思い、次に、最後に一人だけちょっと遅れて出てきたお爺さんに「私、日本から来ました。」とドイツ語で話しかけてみた。彼は驚いて「ドイツ語を話せるの？」と聞いてきたので「いやー、ちょっとだけ。」とポーズをしてやめておいた。これ以上調子に乗ると恥をかく。「ちょっと」を“klein”（小さい）という言葉で代用してしまったくらいだから。（正しくは“bischen”という）



クウェンペンレストランの付近



倉庫の前に牛がいる。牛は器用に石ころだらけの坂を昇り降りする。

時間があるのでゆっくり行く、ということなので二時すぎくらいに出発。そうしたらすぐに通行止めによる渋滞が発生する。例によってあの忌々しい崖崩れ多発地帯だ。過去にも何度か似たようなことがあった。しかしそれでもここを通るしかないのだ。だからなのか、あるいはそうではなくて初めから工事の予定があって来ているのか、いつも近くにパワーショベルが待機していていつも一時間以内にトラブルを解決してくれる。そしてさらにブータンの天才的なドライバーたちの神業によってやがて車は無事に通過できるのである。

そして五時過ぎ、車はホコリにまみれながらようやくプナカの「サンドベルリ・ゲストハウス」に着く。2012年にも泊まったことのあるホテルだ。

ところで私はこの翌日にプナカのある小学校を訪問することになっていた。でも勿論その小学校を選んだのは私ではない。ブータン当局がそちらの都合なども考え合わせてアレンジしてくれたことである。私はそのためにその小学校へのお土産として二か月がかりで制作した、日本という国を紹介するためのスクラップブックを三冊持参していた。それを小学校に渡す前にガイドさんたちに見てもらおうと、大変感心していただいたようでC氏は「三冊もあるならもう一か所別のところにも持っていきよう。七日の朝、出発前にパロの小学校にも寄るといのはどうか？」と言い出したので焦ってしまった。「いや、三冊あるといっても内容がそれぞれ違うので(伝統文化とか地理とか言語とか)一つのところに三冊まとめてお渡ししたいのだ」ということを何とかわかってもらう。それにいきなりもう一校追加、なんてあまりにも乱暴だ。私にだって先方様にだって心の準備というものが必須ではないか。

サンドベルリのホテルでは前回はコテージに泊ったが今回は本館の二階である。シャワーは夕食後に浴びた。

明日の準備は万端整う。でも眠れない。疲れているはずだけどやっぱり翌日のことがあるからだと思う。プナカは標高も高くないし盆地なので他の地方より気温が高い。チーズが心配だなあ……。でも仕方がない。明日が終わったら眠れるだろうしチーズだって何とかなるだろう、と腹をくくる。天井に大きなプロペラ扇風機がとりつけてあるが効果はイマイチである。

5月6日（水）

殆ど眠れなかった。前夜雨が降って、少し涼しくなるかもしれないと期待したがどうかな。紺のウールの着物に黄色とオレンジの半幅帯で。注目必至である。朝食のために食堂に行くと、まだ七時半だったのでそんなに人が出てきてはいないかなと思ったが、すでに英語圏からの欧米人の団体さんが賑やかにお食事中だった。私は隅の席でそそくさと食事をすます。あまり時間もないのだから。でも他のお客さんたちが団体さんでよかった。注目があまりダイレクトにこちらに集中しないから。第一関門突破！である。

出発の仕度を済ませ人々の注目を浴びながら朝のロビーに降りていく。七時五十分ごろ集合して出発のはずだったが C 氏が書類にサインをするのを忘れたとかで戻ったりしてもたつく。でもほぼ八時ごろ出発。

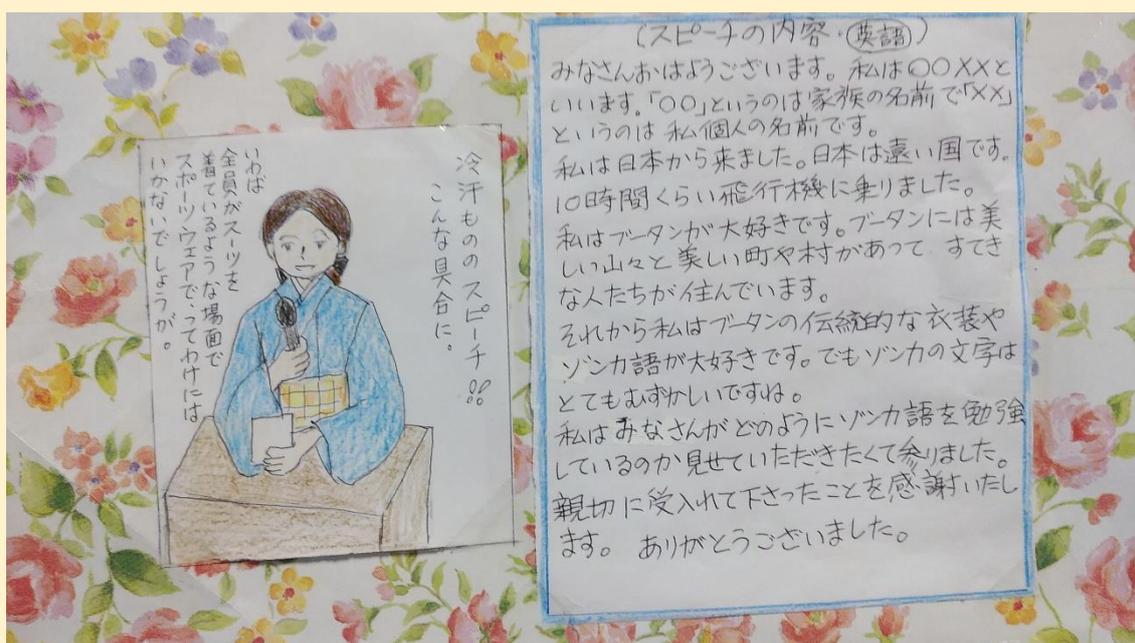


プナカのラブサッカ小学校（予定表に書いてある文字を読むとそうなるのだが、C氏が教えてくれた小学校の名前を聞き取ることがなかなかできなかった。）は山の上。どこまでもどこまでも登って行く。なかなか着かない。こりゃ、ハンパじゃない。まるで高尾山口から高尾山頂に登る感じというのか、神戸の町から六甲山に登る感じというのか……。そしてやっと小学校に到着。始業時間前でまだ子供たちがそこらへんにパラパラいる。校長先生にご挨拶をして、お土産を持参した旨を伝える。このあといろいろと見学の段取りを話し合う。

そして朝礼。正面に向かって左の方に臨席、待機する。そして校長先生からご紹介を受け、後半短いスピーチをする。（アルバムに記載してあるのでこの部分の詳細は省略する。）



毎朝行われるらしい朝礼



職員室や校長室でいろいろな対話をした後、一年生のゾンカ語（ブータンの国語）のクラスを見学する。日本の小学校一年生にひらがなを教えるような感じだった。後半私も一緒にゾンカ語の文字の練習をする。そしてそのあと学校の敷地内を見学する。全部で二時間くらいいい感じだった。そしてよくお礼を申し上げて失礼する



左が女子トイレ、右が男子トイレ

校庭の一角の遊び場

帰り道、山の上から車で駆け下るがそれでも「まだか、まだか」という感じで、来る時より長く感じたくらいであった。こんなに遠かったのか、と思う。なぜ小学校がこんな山の上にあるのだろうか？水害を避けるためだろうか？などとしばし考えて、ああ、多分そうだ、と気が付いた。子供たちが安心して走り回れて日当たりも良い広い土地が下の方にはなかなか見つけられなかったからであろう。子供たちの身体を鍛えるため、などという理由であるわけがない。ブータンの子供たちは幼児のころからすでに都会化したところの子供たちよりはずっと身体が強く逞しいのだ。そのことがすでにあるので山の上に小学校を作って

も全く問題ないのである。

その後、再びのドチュ・ラ越えでティンプー、パロ方面に戻る。ドチュ・ラで昼食。今日のノ・シャ（牛肉）の料理は柔らかめで美味しかった。

ドチュ・ラではいろいろな国のグループを見た。中国人らしい人たちもいた。（中国は、もちろんこれは一般民衆は与り知らない話だろうが、ブータンの国土をネズミが齧るように浸食し続けているそうである。国境部分で勝手に道路を伸ばす工事をしてブータン側が抗議をしても無視、だそうだ。あんなに広い国土を持っているくせにこんなに小さな国土のブータンを齧るなんて！そんなにガツガツして何になるんだ？とつい考えてしまう。）

インド人のご家族もいた。長女の方と一緒に私の写真を、その妹さんが写して下さい。その前に妹さんはスマホで私の写真を撮っていた。私のカメラで撮ってもらったほうの写真は帰ってからプリントしてみたら「失敗」であった。

そのあと車の中でずっと聞いていた音楽の話になる。みなブータンの曲だが一つとても気に入った曲があり、私は「もしCDがあるのなら買いたい。」と言ってみる。「どの曲だ？」と聞かれるがゾンカ語がほとんど聞き取れない私には説明が難しい。

時間があるのでティンプーの町に寄る。以前に比べてものすごく建物が増え、道も整備されて都会っぽくなっているのでびっくりする。まるでヨーロッパの地方都市のようである。その街並みの中を少し歩くが、着物で注目されているというのにその姿で滑って転んで尻もちをつき、見つともない姿をさらす。でもすぐに起き上がり、笑顔で「大丈夫、大丈夫」と言う。



ティンプーの目抜き通り

最近出来たというスーパーマーケットに連れて行ってもらう。「何か買う？」と聞かれる

が、「見たいだけ。」と言う。しかしまあ、何でもある。食料品のみならず洋服もCDもあるようだ。でもそれを見てみたところで私の欲しい曲を探す手がかりにはならない。

見るだけでスーパーを出て例の曲を探してもらおう。車を止めて音楽を片っ端から流して探してくれるがなかなか出てこない。あれだけ何度も聞いた気がするのに。時間ばかりが過ぎて申し訳ないので出発してもらって走りながら探す。

パロの町に入るころ、やっと見つかる。「これ、これ！」しかしそれはCDになっていないと言われる。今の国王陛下のご結婚の時に一般の中学生が作ってお捧げした祝婚歌なのだそうだ。

C氏はそれを自分のスマホから私のケータイに送ってくれるという。私のケータイにはそういう機能はないと思う、と言うと、夫か息子か娘のケータイにでもいいと言う。それで私はホテルの部屋に入ってから夫に電話をして聞いてみることにした。

ホテルは前回にも泊まったカンクーリゾート。部屋はやはり斜面の上のコテージである。しかし食事は「部屋まで運ぶ」とは言われず食堂まで食べに行く。まあ、その方が気が楽である。でも最後の夜だからといってC氏たちが同席する。ちょっと食べにくい。

楽曲の送信について、夫は海外とのメールのやり取りは危険だから自分が会社で使っているパソコンに送ってもらえと言う。それでその旨をC氏に伝えるが、私は英語で複雑なことは喋れないので文章に書いて渡す。書けばだいたいうまくいく。わからない単語は携帯の辞書をひいた。しかし夫との通話によってバッテリーがすっかりなくなってしまった。

5月7日（木）

朝、ケータイが動かないと何時かわからないのでテレビの時刻表示に頼る。しかし日本の番組とは違って必ず時刻表示が出ているわけではない。しかもちょっと変な気がする。さっき5:45と出ていたのに

しばらくたってからまた表示を見ると5:17になっているとか……。インドとの時差の関係だろうか？

空が明るくなり始めるころ起きて旅の記録書きに励む。途中お腹が空いたので備え付けの紅茶を飲んだり残してあったクッキーを食べたりする。そして朝食は八時半と聞いていたのもうそろそろ行く用意をしようかと思っていた八時二十分ごろ、急にドアがノックされ、慌てて出てみるとメイドさんが来ていて「部屋を出てくれ」と言う。荷物は完璧に纏めてあったのでわけがわからないまま忘れ物がないかを確認しながら食堂へ向かう。（スーツケースは運ぶから置いて行けと言われる。）そして食堂に着いて「どうぞ朝食を」と言われ、時計を見てびっくり。もう八時五十分だった。いったいどういうことなんだ？

朝食後空港に向かう。出発前にC氏とK氏にお礼（チップ）を渡す。そして空港に入る前に写真を撮らせていただき、私の写真も撮ってもらおう。（こちらはひどい出来だった。後で

捨てる。)

空港はすごく人が多い。欧米人とインド人が多い感じである。お土産を少し買い足す。リングジュースをバンコクまで用に買う。一ドル。これはブータン産で250ml入り。ブータン以外では売っていない。ブータン航空機の中でサービスで出たこともある。



バンコクに着くともう十七時近い。昼間の時間を使っちゃったんだな、と思うと疲れが出てきた。夕食は機内食の残りを食べることにして、待ち時間に日記も書く。でもそれも疲れるので長くは続けられない。前は長い待ち時間の間に街に出てみたが、タイへの入国やまた出国の手続き、それから何キロ続いているのかわからない人込みから抜け出すのにとても時間がかかって懲りたことから、もうあんな馬鹿なことはしないと決めてずっと空港内で過ごしたのだがとても長かった。疲れた。

でもタイ航空のチェックインなどをする場所がどこにあるか分かるようになってきた。バンコクは空港内も何となく暑い。税関通過後飲料が必要だったが売っているものは高いし、パスポートを出したりしなくてはならないし、それが面倒で水飲み場を探してその水を汲んだりした。やっと搭乗してサービスの飲み物が出てくるのが待ち遠しかった。

免税店で娘への土産のポロシャツと縫いぐるみのゾウを買った。ブランド品のようなだった。

機内では席はまた真ん中。かなり辛かった。夜食のサンドイッチは時間をかけて食べたが朝食は食べなくなかったので断った。他の人が食べているのを見るのも嫌だった。エコノミーの深夜便は辛いなあ。次から他の方法を考えようか・・・。

5月8日（金）

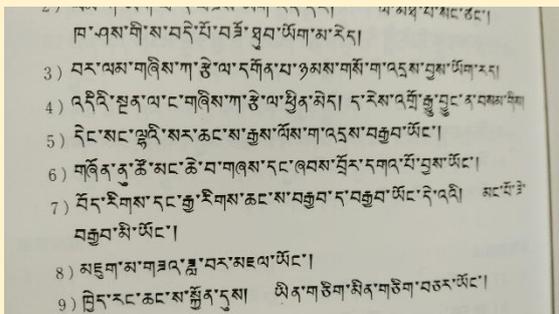
予定よりやや早く羽田に到着。荷物が出てくるのに三十分以上かかり、その後やっと公衆電話で家に電話するが夫は出勤した後で、電話には息子が出る。

くたびれ果てていて電車に乗って帰るのはしんどいと思ったが生憎バスはすぐにはないので仕方なく電車にする。それにしてもスーツケースが重い！チーズやジャムが入ったので15kgくらいになったか？でもモノレールの乗り場はすぐそこだしずっと座っていらしたし思ったほど大変ではなかった。浜松町から京浜東北線に乗り換え、大宮駅からはタクシー

で帰る。

弟と妹にも帰国報告の電話をし、写真はすぐにプリントに出す。帰ってから、箱根の火山活動が活発になっていることを知った。それから英国の王女様のご誕生したのは5月2日だと知った。夜、息子と娘が食器洗いをしてくれる。

C氏からの楽曲の送信はまだない。



ゾンカ語の文字（これはチベット語のテキストですが）



リンゴジュースとお土産の置物

【後日譚】

C氏が送ってくれると言った例の祝婚歌がなかなか届かなかった。どうやら気の良い彼は安請け合いをしてしまったものうまくいかなかったらしい。それならそれで事情を伝えてもらえばこちらも納得するものの、「ごめんなさい、できませんでした。」という彼からのメールが届いたのは一か月もあとのことだった。おかげで私はそれまでの間に旅行会社に問い合わせたりなど、いろいろ動いてしまった。

そして「できなかった」という彼を責める気は全くないが、あの美しい曲を私はどうしても忘れることができず、どうしても手に入れたかった。それで「日本・ブータン友好協会」というところを煩わせることまでしてとうとうその曲を送信していただくことができた。ブータンの国営放送局に当たって下さったらしい。そして私は夫に頼んでその曲をCDに入れてもらった。

C氏はその後忘れたころにメールを送ってくるのが二、三回あった。私はそのたびに一生懸命英文で返事を書いたがその「文通」も一年間ぐらいで何となく終わった。

【完】